

## 對鷗莊

児玉 寛嗣

隅田川沿いはウォーキング・コースの一つでもある。川にはいくつもの橋が架けられている。ほとんどが、関東大震災後の復興事業の一環として昭和初期に建設されたもの。その一つ、一つのデザインに特徴があり橋を眺めながら歩くのも一興である。波のうねりを思わせる曲線美豊かな白髭橋もそのひとつだ。橋名は川岸近くの「白髭神社」に因む。

橋の袂の石碑に「明治天皇行幸 對鷗莊跡」と刻まれている。對鷗莊は三条実美の別邸であった。対岸に高層マンションが建ち、川岸も剃刀堤防になっている今では想像も出来ないが、このあたりは向島を望む風光明媚な地で多くの著名人の屋敷が軒を連ねていた。三条も京風の優雅さをこの地に求めて別邸を建てた。行幸が行われたのは明治六年十二月で病氣静養中の三条を見舞ったもの、と石碑の傍の案内に書かれている。

以下は海音寺潮五郎の小説「西郷と大久保」からの抜粋である。

西郷は帰宅すると、自分の決心のほどを手紙に書いて三条家に届けさせた。三条はその手紙をたずさえて岩倉を訪問したが、岩倉は大久保の強硬な態度に初一念をよびさまされて立ち直っている。(略)三条は西郷を呼んで、岩倉の意見を話して翻意を頼んだ。もちろん、西郷は拒絶した。(略)その後、三条は突然に卒倒して、人事不省になった。

病気になった三条は職務を離れ、對鷗莊で静養していたのである。公家出身の三条にとって「維新の三傑」と呼ばれたふたりの仲介役は荷が重すぎたのだろう。征韓派のなかには三条の病気を仮病ではないかと疑った者もいたようだ。だが、大久保暗殺、三条は薩長のバランサーとしての役割を果たし、天皇の信任も厚く内大臣の時に総理大臣を兼任したこともあった。西郷、大久保亡き後、十年以上生き延びた。

對鷗莊の行く末だが、白髭橋の架設工事に伴い、多摩聖蹟記念公園(多摩市連光寺)に移築された。それも今はなく、跡地は對鷗台公園となっているそうだ。

ひとつの石碑から明治的一幕を辿った。